ロシア帝国からムスリム女性の解放を訴える

—— O・S・レベヂェヴァとA・アガエフのイスラーム的男女平等論 ——

帯 谷 知 可

【要約】二〇世紀初頭、約二千万のムスリムを抱えたロシア帝国におけるムスリム女性解放論を俯瞰することを視野に入れ、本稿は、この時期に相次いでロシア語により刊行された、イスラーム的な男女平等を主張した二つの著作、ロシア人女性翻訳家・東洋学者オリガ・レベヂェヴァの『ムスリム女性の解放について』（一九〇〇）、およびアゼルバイジャン出身の改革派ジャーナリスト、アフメドベク・アガエフの『イスラームによる、そしてイスラームにおける女性』（一九〇二）に焦点を当てて、それらの骨子を紹介しつつ、両著作中の参照関係を整理し、当時の国境を越えたムスリム女性解放論のありようの一端を明らかにしたい。それは当時のロシアにおけるイスラーム世界に対するオリエンタリズムに抗しながら、エジプトのカースイム・アミン、トルコのファトマ・アリエ、英領インドのサイド・アミール・アリーらの主張に共振する性格をもった。

史林 一〇四巻一号 二〇二二年一月

はじめに

問題の所在と本稿の目的

ヨーロッパにおける第一波フェミニズムは、ロシア帝国においてもロシア人女性の解放という課題を喚起した一方で、

ロシアは一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての時期、ヴォルガ・ウラル地方、カフカース地方、トルキスタン地方（中央アジア）、シベリアの一部などその地続きの領土の内部に二千万人ともいわれるムスリム人口を抱えていたのであり、ここではやがてムスリム女性問題、すなわちロシア・ムスリム女性の解放という別の課題が議論されることとなった。

ロシア帝国やその後のソ連を対象とするジェンダー研究や女性研究の分野では近年たいへん多くの蓄積があるが、当然のことながら関心の中心はロシア人女性にあり、そして議論は女性革命家やロシア革命と女性解放との関連に集中しがちである。例えばロシアにおける女性の解放や男女平等を論じた *Stites* (1991) や *Rutchild* (2010) もロシア・ムスリム女性の問題にはまったく言及していない。また、イスラーム・ジェンダー学の見地からヨーロッパ起源のフェミニズムに対するイスラーム世界の反応について議論するような研究においては、ロシアおよびソ連のムスリムの問題はほとんど視野に入っていない。従って、ロシア・ムスリム女性の解放という問題はこれらいずれの研究潮流においてもとりこぼされてきた部分だと言ってもよいだろう。

一方、中央ユーラシア史や中央アジア史研究の分野では、ロシア・ムスリム女性の解放をめぐる問題については、ムスリム知識人によるジャヤデイド運動などのイスラーム社会改革運動の文脈で注目され、それら知識人の母語であったところのテュルク諸語の一次史料に基づいた研究が進みつつある。^① その一方でロシア語でもムスリム女性の解放を訴える発信がわずかながらなされていたことは看過されてきた。ロシア・ムスリム女性解放論のありようを俯瞰的にとらえるためにはその双方を視野に入れ、さらにそれらがロシア帝国内外の思想や運動とどのような関係性のもとにあったのかを明らかにする必要があるだろう。

本稿ではそのような視座から、ロシア帝国から発信されたロシア語によるロシア・ムスリム女性解放論に着目し、その代表的な二つの著作、すなわちロシア人女性翻訳家・東洋学者のオリガ・セルゲーエヴナ・レベヂェヴァ *Ольга Сергеевна Лебедева* (一八五四―一九二二以降?)^② による『ムスリム女性の解放について』(*Лебедева 1900*)、およびアゼル

バイジャン出身の改革派ジャーナリストのアフメドベク・アガエフ Axmetbek Ateb (一八六九—一九三九)^③の『イスラームによる、そしてイスラームにおける女性』(Araeb 1901)に焦点を当てる。この二つを代表作として取り上げるのは、拙稿(帯谷二〇一七)で示したように、ロシア帝国のトルキスタン総督府に異族人教育の専門家として派遣され、そのまま総督府首都タシケント(現在のウズベキスタン共和国の首都)に留まった東洋学者ニコライ・オストロウモフ Nikolai П. Остроумов (一八四六—一九三〇)の見解に基づいていることである。オストロウモフは自身の著作『ムスリム女性の権利の現状』(Остроумов 1911)においてレベヂエヴァとアガエフの著作に言及し、それらを厳しく批判することを主旨としながらも、これらの著作が進歩的なロシア・ムスリム女性の一部、特にオレンブルグ(ウラル山脈の南端に位置するロシアの都市で、当時は後述のカザンと並んでロシア・ムスリムの政治的文化的中心のひとつでもあった)のムスリム女性たちに教育や言論活動を促し、少なからぬ影響を与えたと評価した(Остроумов 1911: 12)^④。それが正しいとすれば、一般にロシア・ムスリムの改革運動の活性化の契機とされる一九〇五年ロシア第一次革命に先立って、ムスリム女性解放論が帝国内に一定程度の広がりを見せていたということになるだろう。

本稿では、これら二つの著作の主張の骨子を紹介しつつ、レベヂエヴァおよびアガエフのイスラームやムスリム女性とその解放に関する「知」は何によって構成されていたのか、彼らが何を参照してムスリム女性解放論を構成したのかを明らかにしたい。著作中の人名・文献名等を整理することによって参照関係を解きほぐし、著者と著作が置かれた時代的・地域的背景も考慮に入れながら、当時の国境を越えたムスリム女性解放論の共振・共鳴関係の一端を明らかにすることを目的としたい。

なお、原綴の表記にあたって、ロシア語は二つの著作が書かれた旧正書法ではなく現代の正書法に、オスマン語は現代トルコ語に準じた表記とした。

オリガ・レベヂェヴァとアフメドベク・アガエフ

オリガ・レベヂェヴァは翻訳家・東洋学者として活動したが、トルコではロシア文学作品を初めてトルコに紹介した翻訳家ギュルナル・ハヌム Gülnar Hanım (ギュルナル夫人)⁵⁾として広く知られる人物である。カザン(現ロシア連邦タタールスタン共和国の首都)のロシア人貴族の家庭に生まれ、後にカザン市長を務めることになるアレクサンドル・レベヂェフの妻となった。テュルク系ムスリム民族であるタタール人の文化的中心でもあったカザンにあってレベヂェヴァはタタール語への関心から、著名なタタール人東洋学者・思想家カユム・ナスイリー Kəvəm Nəsiyri (一八二五～一九〇二)に師事してタタール語やオスマン語を含むテュルク諸語、アラビア語、ペルシア語などを学ぶようになり、タタール知識人やロシア人東洋学者らとも広く交流した。一八八九年にオスマン帝国の出版言論界の重鎮アフメト・ミドハト Ahmet Mehat Efendi (一八四四～一九二二)と知己を得たことをきっかけに、イスタンブルにたびたび滞在するようになり、かねてから構想していたロシア語・オスマン語双方向の翻訳に着手した。特にプーシキン、レールモンツフ、トルストイなどのロシア文学作品を初めてオスマン語に翻訳したことで名声を得、アブドゥルハミト二世より勲章を授与されている。その一方でレベヂェヴァは、時にロシアで最初の女性東洋学者とも評されるように、自身も東洋学的な論考を執筆しながら、当時ヨーロッパ各国持ち回りで開催されるようになっていた国際東洋学者会議にしばしば参加し、ロシアにおける東洋学の組織化と、ムスリム女性の解放やタタール人に対する教育支援などを強く訴えるようになった。本稿で扱う著作はレベヂェヴァの女性解放論の集大成ともいえるべき位置づけのもので、刊行前年にローマで開催された国際東洋学者会議でレベヂェヴァが行った報告を下敷きにしている。なお、レベヂェヴァの一九一三年以降の動向は不明であり、没年や亡くなった場所は特定されていない。

一方、アフメドベク・アガエフは、トルコ名アフメト・アールウル Ahmet Agaogluとしてより有名だが、ロシア帝国

領内のシユシヤ（現アゼルバイジャン共和国南西部ナゴルノ・カラバフの都市）出身のジャーナリスト、改革主義者である。シール派ムスリムの貴族の家庭に生まれ、チフリス（現ジョージア共和国の首都トビリシ）と帝都サンクトペテルブルグでロシア式の教育を受けた後、フランスに留学し東洋学を修めた。帰国後バクター（現アゼルバイジャン共和国の首都）で新聞『カスピ』*Kaspi* など当時のロシア・ムスリム定期刊行物の編集に携わるようになり、ロシア第一次革命後にはドゥーマ（国会）の代議員として政治活動を開始するも、一九〇八年オスマン帝国への亡命を余儀なくされた。そこでは同じくロシア帝国領出身のタタール人ユスフ・アクチュラ *Mustafa Yusuf Akcura*（一八七六—一九三五）らとともにパン・テュルク主義的運動に傾倒した。やがてムスタファ・ケマル・アタテュルク *Mustafa Kemal Atatürk*（一八八一—一九三八）の信頼を得てアタテュルクの創刊した新聞『国民主権』*Hakimiyet-i Milliye* の編集長となった。トルコ大国民議会議員に選出され、新生トルコ共和国の憲法制定にも関わるなど、アガエフはアタテュルクの西洋化・世俗化による近代化を支持し、トルコでその生涯を終えた。本稿で扱う彼の著作は『カスピ』編集者時代に書かれたものということになる。

レベヂェヴァとアガエフの間に、直接の交流があったのかどうか、現時点では明らかではなく、また本稿で取り上げる著作においてもお互いの名にはまったく言及していない。しかし、彼らにはいくつもの共通点があることもまた事実である。まず、年齢的にはレベヂェヴァが一五歳ほど年上であるが、活発に言論活動などを展開した時期はほぼ重なっていること、裕福な貴族階級の出身で、ロシア・ヨーロッパ式の教育を受けた上に東洋学の学問的な訓練を積んでいること、母語以外に複数のヨーロッパ諸語・東洋諸語に通じたポリグロットであること、後半生においてトルコと密接な関係を持ったことなど、出自や経歴からくる共通点である。さらに、おそらくはそれらの結果として彼らが抱くようになった、ムスリム女性解放を訴える主張においても共通点を認めることができるのである。

クルアーンとハディースに基づいたイスラーム的男女平等論

レベヂェヴァやアガエフのムスリム女性の解放を訴える主張とは、端的にいえば、一九世紀末から二〇世紀初頭当時のムスリム女性をめぐる現状を「極めて悲惨」なものと認識しつつ、しかしイスラームはその初期の教えに立ち戻れば決して女性を抑圧するものではなく、むしろ女性を尊重し、男女平等を保障している、従ってイスラームの信仰を維持しながら近代化を成し遂げるのは可能であるというものである。そしてそのことを、クルアーンとハディース（預言者ムハンマドの言行録）、その他多様なイスラーム史文献や学術書などに依拠しながら、イスラーム史において男性に劣ることなく活躍した傑出した女性の存在とその功績を提示することで立証しようと試みている。さらに、多数の優れたムスリム女性が存在した史実があったにもかかわらず、なぜ後世になってムスリム女性の極めて悲惨な状況が生じたのかといえ、それは歴史の経緯の中でムスリム自身の誤ったイスラーム理解が蔓延し支配的になったことによるとしたのである。このような主張を本稿では便宜的に「イスラーム的男女平等論」と呼ぶことにしよう。

こうした立場は、当時のロシアの論壇でもしばしば展開された、イスラーム世界やイスラーム文化そのものを女性のヴェール着用や隔離の慣習ゆえに「本質的に男性が女性を抑圧する野蛮で後進的な文化」と決めつけるような、一九世紀ヨーロッパのフェミニズムの言語を取り込んだ本質主義的で植民地主義的な論調とは一線を画する性格のものであったとみることができる^⑤。本論でこれらを取り上げる意義の一端はその点にもあり、これまであまり注目されてこなかった、ロシア帝国からロシア語で発信されたムスリム女性解放論を、例えば当時の状況についてアハメド（二〇〇〇）がイギリスとその植民地エジプトを事例に論じたような議論の中に位置づけることも視野に入れたい。

それでは以下、両者の著作を適宜比較参照しながら論を進めたい。以下において、Lはレベヂェヴァとその著作、Aはアガエフとその著作を示すこととする。L、Aのアルファベットに続く丸数字は本稿のために便宜的に付した通し番号で

ある。また、ページ数はそれぞれの原書に付されているページ数である。日本語訳は筆者による試訳であり、訳文において「」で囲った部分は筆者による補足ないし説明である。

- ① 例えば磯貝(二〇一四)は、タタール語の一次史料に基づいて二〇世紀初頭のタタール人女性の言論活動や女子教育の問題を扱っている。
- ② レベチエヴァに関する重要な先行研究としては、Frindley (1998)、Orkati (2010)、Oleay (2017)がある。いずれもレベチエヴァの人となりを知ることのできる数少ない資料としてオスマン帝国側の資料、主としてアフメト・ミドハトが残した著作、書簡、その他の関連資料に依拠しているが、前者は基本的にミドハト研究であり、後二者(同一研究者である)はトルコにおけるロシア文学という観点から翻訳者・文学の仲介者としてのレベチエヴァに着目したもので、レベチエヴァのムスリム女性解放論はその視野にさほど入っていない。Rorlich (2016)にもロシア帝政末期のムスリムのアイデンティティとジェンダーの観点からレベチエヴァ(および若干のアガエフ)への言及がある。また、磯貝真澄氏によれば、現代のロシアのタタールスタンではヴォルガ・ウラル地方の女性をめぐる研究において、一部の研究者がレベチエヴァに着目している(二〇二〇年九月二二日開催の「中央ユーラシアのムスリムと家族・規範」研究会にて)。
- ③ アガエフに関する先行研究としては、Stricker (2003)が充実したモノグラフである。ここでは、女性解放論は彼のより大きなテュルク・ムスリム社会改革運動構想のあくまでも一部をなすもので、彼にとつての重要性は二義的なものだったとの分析がなされており、カースィム・アミンの女性解放論との比較対照についても若干言及があるが、同時代の女性解放論との共振や共鳴という視点は無い。拙稿(帯谷二〇一九)ではまさにそのような観点からアガエフの当該著作の概要を紹介した。その他、Ariazate (2015)はアガエフの当該著作のアラビア語翻訳の経緯を紹介している。アガエフの後半生、すなわちトルコ共和国のジャーナリスト、政治家としてのアガエフについてはトルコで多数の文献がある。また、現代のアゼルバイジャンにおいて現代のナシヨナリズムの文脈で「アゼルバイジャン・ジャーナリズムの父」という位置づけのもと、一部で再評価の動きがある。
- ④ なお、オストロウーモフはまた、これらの著作の主張が同じロシア帝国領内のムスリム地域でも中央アジアにおいては極めて否定的に受け止められたことにも言及している。
- ⑤ 「ギュルナル」はトルコ語でバラもしくは石榴の花を意味する女性名で、イスタンブル滞在よりも前からレベチエヴァが通称として自ら好んで使っていた。
- ⑥ ロシア帝国においてロシア・ムスリム女性に向けられた本質主義的で植民地主義的な視線や言説については、例えば拙稿(帯谷二〇一六)を参照されたい。また、一九世紀ヨーロッパの植民地主義がフェミニズムや文化人類学の言語を取り込んでイスラーム世界にそのような視線を向けていたという議論はアハメド(二〇〇〇)に詳しい。

第一章 二つの著作の概観

まず、二つの著作の概観を示しておこう。レベチエヴァの著作『ムスリム女性の解放について』は一九〇〇年に、アガ

エフの著作『イスラームによる、そしてイスラームにおける女性』は翌一九〇一年に出版された。前者は全三六ページ、後者は全五九ページである。いずれもロシア語で書かれ、レベヂェヴァの著作は帝都サンクトペテルブルグで、アガエフの著作はザカフカース地方の当時の文化的中心のひとつであったチフリスで刊行されたことから、当時のロシア国内向けに、ロシア語の論壇やロシア語使用者を読者層として意識し、上述の「イスラーム世界やイスラーム文化そのものを女性のヴェール着用や隔離の慣習ゆえに『本質的に男性が女性を抑圧する野蛮で後進的な文化』と決めつけるような論調」への反論もしくは挑戦として提示されたものだったと理解してよいだろう。

構 成

両著作には章立てや小見出しは付されていないが、論の運びはおおよそ次のようにまとめることができる。

L ムスリム女性の現状／クルアーンにおける男女平等／イスラーム史上の傑出した女性たち／イスラーム文明の進化の停止／ムスリム女性に対するヨーロッパからの影響と支援／同時代のムスリム女性文筆家たちの活躍／同時代のムスリム（男性）著述家たちの功績／ヨーロッパ人は何をすべきか（東洋学協会の組織化と教育支援）

A ムスリム女性の現状／ヨーロッパの反イスラーム的文獻／女性を尊重したムハンマド／クルアーンとハディースの進歩性／女性の地位・権利に関する問題（二夫多妻、隔離、ヴェール、相続、婚姻）／イスラームにおける女性の発展の歴史／イスラーム史における傑出した女性たち／ムスリム女性の地位を凋落させたのは何か／現代ムスリムの喫緊の課題（女性問題の解決と文字改革）

ムスリム女性に関する現状認識

次に、ムスリム女性解放論を展開するにあたっての基本的な現状認識、すなわち一九世紀から二〇世紀へのまきに変わ

り目にあつた時代のムスリム女性の現状をレベチエヴァとアガエフがどのように捉えていたかについての記述を以下に示そう。

L①「きわめて最近私たちは、一八九九年一〇月のローマ王立大学で行われた第一二回「国際」東洋学者会議での演説において、ムスリム女性の解放の必要性について述べた。…この問題は人道的見地から重要であるのみならず、偉大な文化的意義を持っている。それゆえに私たちは再びその解決の道を示し、文明化された全世界に対し協力を呼び掛けるのである。なぜなら、私たちの世紀は、ムスリム女性を今置かれている隷属状態から脱出させる、まさにその時だからである。

狂信的で教育のないムスリムの大部分と、それに加えてイスラームを知らないヨーロッパ人たちは、イスラームは社会生活から女性を排除し、男性と同様の教育を受けることを許さないと理解している。しかしこれは、それと闘わねばならないだけでなく、根絶せねばならない偏見である…。」(三〇四頁)

L②「それから「ムスリムの文明の進歩が停止してから」というものムスリム女性はますます男性の我儘に従属するようになり、男性は嫉妬深い横暴さによって、イスラームは女性に学びや男性と同等の権利を持つことを禁じているとの偽りの教義で女性を説得することに成功してしまった。

彼女「ムスリム女性」は、彼女を助けるべくヨーロッパの影響が及んでこなかったなら永久に奴隷に留まったかもしれない。」
(一六〇一七頁)

A①「フェミニズムがかくも顕著な前進をし、文明化された諸民族の間で女性の地位に関する問題が社会的諸機関と優れた活動家たちの頭脳をとらえ、ヨーロッパとアメリカの複雑化した社会生活が、家長制的家族の基盤を引き裂いて、家族を代表する男性という当たり前の庇護者を女性から奪い、そのこと自体によって、それまでは男性が独占して当然だと思われてきた舞台を女性に開きつつ、女性に自分の生活と糧について自ら心配する必要性を提示し、そして、ついには何世紀にもわたって確立していた、

強い性が弱い性を隷属させる権利という正義に懐疑を抱き、より繊細な感情と公正と真実の意識が後者「Ⅱ弱い性」のためにヨーロッパでもアメリカでも反応を引き起こし、女性の権利は日々ますます拡大し、男性の権利と同等になりつつある――まさにこの時に、アジアとアフリカではイスラームを信仰する幾百万もの女性が、明らかに、最も苦しく光の当たらない隷属の運命を余儀なくされ、最低限の人間としての権利のみならず、例えば自然な成長や自由な呼吸といった動物や植物など低級な生物が享受している権利さえ奪われている。」(一―二頁)

A②「ムスリム女性の現状は、その全般的な苦難と暗澹さにも関わらず、未だ強力な抗議も確信的な改革者も呼び起こしてはいない。時折トルコやエジプトの刊行物では女性擁護の声が上がリ、勇気ある人々がムスリム女性のあり得ない現状、家族や社会におけるその破滅的な結末、ムスリムにおける女性の生活条件の改善の必要性、知的身体的才能を束縛する眼差しからのムスリム女性の解放について語り始めている。しかしこれは今のところまだ、おどおどとした、決然としない声であり、大きな但し書きを伴ったり、しばしば直截的でなくほのめかしによって語られる。それらはムスリム社会に特別な影響を与えていないし、与えることはできないのだ。」(二―三頁)

A③「ムスリムにおける女性の現状について言えば、我々が主として念頭に置いているのは、ヨーロッパ風に暮らしている上流社会の人々を背教者を見るかのように見、その内部では女性が絶望的に悲惨な状況のままに残されている、ムスリム大衆である。」(四頁)

結論としての焦眉の課題

イスラーム的男女平等論に立って論を展開した後、レベヂエヴァ、アガエフとも最後に「今、何をすべきか」に言及し

ている。それをレベチエヴァは「私たちヨーロッパ人」として、しかし自分が身近に接してきたタタール人女性やオスマン帝国の女性たちに多大なシンパシーを抱く立場から、アガエフはシリア派ムスリム（すなわちベルシア的な）の出自を持ちながらパン・テュルク主義に傾倒していく改革派としての立場から、以下のように語っている。

L③「…東洋の知的復興というこの偉大な課題において、私たちヨーロッパ人は最も活動的な参画をする義務がある。かつて私たちは多くを東洋から借用したが、今度は、最新の文明がその啓蒙と人道的影響を東洋と分かち合うという精神的な義務があるのだ。

東洋を何世紀にもわたる眠りから目覚めさせよう！そのために私たちはまず第一に、東洋学協会の諸支部の設立を提案し、その助けによって東洋の諸民族の知的物質的要求を満たす必要がある。そのように西洋と東洋の関心をつなげつつ、これらの協会はあらゆる宗教的政治的問題の外で活動すべきである。」（二五～二六頁）

L④「東洋にとって最良なのは、私たちが差し伸べている親密な手を振り払わず、ともに働くことだろう。

私たちはすでにいく分か、よりよい未来に近づきつつあり、それゆえにムスリム女性に歴史的権利を取り戻させ、宗教と現代文明の双方にかなった生活を与えることができるよう全精力をもって努力せねばならないのだ！

以上に述べたことすべてを結ぶにあたり、次の基本的命題を提示する。

- 一、イスラームはムスリム女性が男性と平等であることを妨げない
 - 二、東洋へのヨーロッパ文明の紹介とそれとの融合のために東洋学協会の組織化を進展させねばならない
 - 三、女子と男子のための学校設立とそこへのヨーロッパ的教育を受けた教員の配置によって、ムスリム女性だけでなく、ムスリム男性の教育レベルもあげるよう努力することが必要である。
- …私たちのささやかな努力が実りなく終わらぬことを、そして到来した新世紀には東洋と西洋がひとつに調和する文化の融合が

あるいは生じるやもしれぬことを期待する。」(二三五―三六頁)

A④「ムスリムの救済、その精神的物質的向上、さらには政治的向上さえも、二つの問題の解決にひとえにかかっている。それは女性問題と、文字改革問題である。…」

女性に身体的発達を許さない、息の詰まるようなハーレムの雰囲気の中で、怠惰な植物的生活としかいいようのない生活を送りながら、女性は種の退化をもた少なからず助長した。文字の困難さは識字教育を強く阻害し、女性の知能と心が明晰になる道を妨害している。女性と文字、これらこそムスリム世界の最も実効力をもつ二つの敵であり、ムスリム世界を徐々に死に追いやる治療したい病である。ごく最近になってやっと、ムスリムはこの二つの問題に真剣な関心を向け始めた。しかし、これに関係してコンスタンティノープル〔「イスタンブル」〕、カイロ、ボンベイ〔「現ムンバイ」〕、カルカッタ〔「現コルカタ」〕でなされ、両性のため为学校で表明されている努力、文字改革に向けてのおどおどとした試みの中の努力は十分ではない。これは慢性の、今にも死を迎えそうな病に抗する効き目の弱い緩和剤に過ぎない。ムスリム世界の覚醒のためには、それが文明化された諸民族の仲間に入るためには、強い揺さぶりが必要である。ムスリムも改革の自らの時代を経ること、ムスリムの間で強固な意志と献身的自己犠牲の人が見いだされることが必要である。このような改革者は、以上に見たように、イスラーム自体の中に、その歴史と伝統の中に、恵もたらす土壌を見出すだろう。繰り返すが、クルアーンも、シャリーアも、それ自体は進歩に反するものではない。」(五七―五九頁)

二つの著作の他言語への翻訳

二つの著作はそれぞれロシア語から他の言語に翻訳、ないし他の言語でも刊行されたことが知られている。レベヂエヴアの著作については、一九〇六年カイロにおけるフランス語版の刊行、一九〇九年テッサロニキで刊行されていた雑誌

『女性』*Kadim* におけるオスマン語版の掲載に続き、一九一九年にはタタール語版からオスマン語への翻訳が行われた（Olcay 2017）。アガエフの著作については、一九〇五年にアラビア語に翻訳され、カイロで出版された（Amr-zaie 2015）。このことも、二つの著作がロシア帝国の国境を越えた共振の輪の中にあつたことを間接的に物語っていると見えるだろう。

第二章 レベヂエヴァとアガエフが言及した人物および文献

さて、タタール人の文化的中心地カザンで生まれ育ったレベヂエヴァと、アゼルバイジャンのシリア派ムスリムの家庭に生まれたアガエフにとって、ムスリムの社会は濃淡の差はあれごく身近なものであつた。前者はロシア帝国内での東洋学者との交流と国際東洋学会議への度重なる参加によって、後者はフランス留学によって、それぞれ当時のヨーロッパにおける東洋学的な知識の最先端に触れる機会を持ち、そして両者ともアラビア語・ペルシア語・テュルク語史料の読解などに自ら取り組む学術的な訓練も受けていた。このような背景のもと、イスラーム的男女平等論を語るにあたって、彼らほどのような知識や情報に基づいて論を構成したのであるうか。レベヂエヴァは著作においてムスリム女性の解放という点で取り上げるべき多くの人名や著作名に言及はしているが、参照文献や引用箇所を具体的に示していない。一方、アガエフは完全ではないが、参照文献や引用元を提示している。

表一は、両者によって言及されている人物および文献名を拾い出し、それらを a～d のカテゴリーに分類して、基本情報 を付加して一覧にしたものである。カテゴリー a はイスラーム史上の傑出した女性、カテゴリー b はおおむね一九世紀中に学術研究や言論活動を行った、レベヂエヴァやアガエフにとってほぼ同時代人といえる人物（*f*）は女性、（*g*）は男性、カテゴリー c はその他の歴史上の人物、カテゴリー d は文献名である。それぞれのカテゴリー内でアルファベット順にならべ、現時点で確定できていないものには名称冒頭に「？」を付して各カテゴリーの最後に配置した。レベヂエヴァが言及しているものには「L言及」の列に、アガエフが言及しているものには「A言及」の列にそれぞれ○印を入力し

た。なお、集計の便宜上、表中のアラビア語等の固有名詞については厳密な転写ではなく、特殊文字や記号を使わない英語風の表記とした。

表一 レベチエヴァおよびアガエフが言及した人物・文献

(カテゴリー a…イスラーム史上の傑出した女性、カテゴリー b…同時代人およびおおよそ一九世紀の人物 (f女性、m男性)
カテゴリー c… a・b 以外の歴史上の人物、カテゴリー d…文献名・刊行物名)

カテゴリー	人物名または文献名	L 言及	A 言及	備考
a	A'isha bint 'Abu Bakr アイィンシャ		○	六一四頃一六七八ムハンマドの妻、アブー・バクルの娘
	Abbasa bint al-Mahdi アッバーサ		○	七九八没 ハールーン・アッラシードの妹
	al-Arzu'ie アル・アルズィエ		○	一〇五八/五九歴 コルドバ、文法と叙事詩の教授 (A)、ヴァレンシアの住、文章家雄弁家、デニアで没
	Aliyrah bint al-Mahdi (U'layya bint al-Mahdiと号) アリーヤー・ビンター・アル・マフディー	○		七七七-八二五 ハールーン・アッラシードの姉妹、音楽的才能に富む
	Alma-Khatun アルム・ハトゥン		○	アタベク一族、シーラーズを治め、芸術・文学・学問を保護、神のような女性 (A)
	Asma bint 'Abi Bakr アスマー・ビンター・アブー・バクル		○	六九二没 アブー・バクルの娘
	Buran (Buran bint al-Hasan) ブーラーン	○		八〇六-八八四/八五 マアムーンの子、別名ハデイージャ、執政ハサン・ビン・サールの娘
	Fadl ash-Shaira ファアズル	○		八七四没 ムタワッキル時代の女性詩人 (L) アッバース朝期の最も優れた詩人の一人、バスラ出身、ファズルとも
	Fatima bint 'Ali ibn 'Abi Talib			七五三没 ウマルの妹、イスラームに改宗、ウマルのムハンマド

フアーティム			○	殺害計画を止める、夫はサイード
Fatima bint Muhammad az-Zahra フマーティム			○	六〇五頃ー六三三ムハンマドとハデージャの娘、アリーの妻
Hafsa ar-Rakuniyya ハフサー		○		一一九〇没、グラナダの詩人、グラナダ出身、才能・美・富・ウィットで知られたグラナダの貴族の一人、Lによれば『芳香』に言及あり
Hassana ハッサーナ			○	Aによればコルドバの著名女性
Hind bint Urbah ibn Rabbia ユンド・ユンナ・ウアブ			○	六三五没 アブー・スフヤーンの妻、ムアーウィヤの母
Kalayeh (al-Kalayeh) カライエ、アル＝カライエー		○		グラナダの詩人、グラナダ出身、Lによれば『芳香』に言及あり
Khadija ハディージャ			○	Aによればサラデインの妻（サラデインの妻は正しくはイスマドウッデイン・アーミナー一七六一ー一八六）
Khayzuran (al-Khayzuran bint Atta) ハイズラーン			○	七八九没 マフデイーの妻、ハールーン・アッラシードの母
Mihr-un-nissa Hanum (Nur Jahān) ミフリンニサー・ハヌム（別名ヌール・ジャハーン）			○	一五七七一ー一六四五／四六六ムガル朝ジャハーンギールの妻、一六一一ー一六二七は実質的な支配者、ラホールに墓廟、英の詩人トーマス・ムーアにより「ラッラ・ルフ」とうたわれた
Nazhun ナスーン		○		一二世紀末頃のグラナダで有名だった詩人、歴史と文学に通じた作家アブー・バクル・アル・ガッサーニーの娘、Lによれば『芳香』に言及あり
Qatr al-Nada カトル・アル・ナダー (Asma bint Khumarawayh ibn Ahmad ibn Tulun)			○	九〇〇没、トゥールーン朝の王女でムータデイドに嫁ぐ、豪華な結婚式の様子はエジプトでオスマン朝期まで語り継がれたムクタデイルの母として実権をふるう
Rabi'a ur-Rai ラービヤ			○	Aによれば最初の女性法学者
Raziya Begum (Raziya Sultana, Jalalat ud-Din Raziya, Raddyia)				一一〇五ー一二四〇 デリーの奴隷王朝（アルバリー朝）第五代

bint Iltutmish (イムティシュ)	○		スルタン。スルタンであったイルトゥットムシユ Iltutmish の娘、母はトゥルカン・ハトウン [Turkan Khatum]、奴隸王朝およびデリー・スルタン朝で唯一の女性君主
Safia サファイヤー	○		グラナダの詩人、セヴィリア出身、弁舌・詩作・書道に秀でていた、L によれば『芳香』に言及あり
Sakinah bint Husayn (=Fatima al-Kubra bint Husayn)	○	○	六七〇/六八〇/六八一 イマーム・フサインの娘、ムハンマドのひ孫、フアーティマの孫
Sayyida Natifa サインダ・ナファイサ	○	○	七六二-七八二 高名なエジプトのハディース学者、シャーフィイーの師
Shajar al-Durr シジャール・ドゥラドゥール	○	○	?-一二五七 エジプト、アイユブ朝サーリフの妻、マムルーク朝初代君主、イスラーム史上最初の女性スルタン
Shuhda bint Abi Nasr Ahmad (Fakhrun-Nisa, Shuhdah al-Baghdadiyyah) フマフルン・ニサー	○	○	一一一二没 al-Katibah (女性書家)とも。フアフルン・ニサーは尊号(ラカブ)で「女性の誉れ」の意、「女性書家」(シユフダ・カーティバ)の職名もあり。夫はドゥライニー。A によればバグダードのマドラサで文学を講義、L によればシェイハ・シユフダとも呼ばれる
Sitt al-Mulk シットウル・ムルク	○	○	九七〇-一〇二三 カリフ・アルムアズィズ・ピツラーフの娘、ビー・エムル・イツラフの姉妹・学者・ムスリムたちの女王 (A)
Takieh タキエ	○		アブドウル・ファラジュ・イスファハーニーの娘、サラディンの時代に歴史を講じ、詩にも秀でる
Tarkhan Khanom (Terken Khatum) タルハン・ハンム (テルケン・ハートゥーン)	○	○	アタベク・サアド Sa'd ibn Abi Bakr の妻で夫の死 (一二二六-) の後ペルシアを治め、学問と芸術を保護 (A)
Turkan Khatum (Terken Khatum) トゥルカーン・ハートゥーン (テルケン・ハートゥーン)	○	○	一〇九四没 セルジューク朝マリク・シャールの妻となったカラハン朝の姫、ハートゥーン・ウル・ジャラーリエーまたはジャラーリイヤ・ハートゥーン (栄光夫人) の異名あり
Ubayda al-Tunburiya オバイダー (ウバイダ)	○		八三〇頃活躍 マアムーンとムタッスィムの時代の歌とタンバリンの名手
Umm al-Bannin bint 'Abd al-Aziz ibn Marwan			ワリード一世の妻、ウマル二世の妹、宮廷内で大きな発言力をも

ウナム・アル・パニーン			○	った
Umm al-Khair Fatma (Fatma bint Ali ibn al-Muzaffar an-Nisaburiyya)	○	○	○	一〇三七―一三七 or 一三三八 ニーシャプールで神学を講義、クルアーン学者でもある
ウナム・アル＝ハイル・ファティマ			○	六六四没 アブー・スフヤーンの娘
Umm Habiba bint Abi Sufyan			○	
ウナム・ハビーバ			○	
Umm Salama			○	コルドバの神学教授 (A)
ウナム・サラマ			○	アブル・アッバース (イブン・サッファーフ) の妻
Umm Salma (Umm Salama) al-Makhzumiyya			○	
ウナム・サルマ (ウナム・サラームを名)			○	一二世紀頃活躍したコルドバの詩人、ゲアタラハラ出身、父アブール・フサインも詩人、ハッサーナ・アト・タミーミーエと姉妹
Ummul-Ula			○	
ウナムル・ウラ、ウナム・アル・ウラー			○	九九四―一〇九一コルドバの支配者ムハンマド三世の王女、詩人、多くの同時代の詩人を招いたサロンを組織
Wallada bint al-Mustakfi			○	
ワッラーダ			○	
Zainab	○			グラナダの詩人、出版者ズイヤードの娘、ハムダと姉妹、Lによれば『芳香』に言及あり
ザイナブ				一一三〇―一二二八/一九一二世紀の法学者
Zainab Umm ul-Muwayyid	○			
ザイナブ・ウナム・ウルムエイイズ			○	七六六―八三一 ハールーン・アッラシードの妃
Zubaidah bint Jafar ibn Mansur (Umm al-Amin)			○	
ズバイダ			○	Lによればシーラーズの人物
? Aishe Hatun			○	Aによればイスラーム初期の法学者ラービアの母
アイシエ・ハトゥン			○	
? Raiya			○	Lによれば神学を教授した
ライヤ			○	
? Umm Ibrahim Fatma al-Ezdani			○	
ウナム・イブラヒム・ファアティマ・アル・エズダニー			○	

b f	Aisha Esmat Taymur (Aisha al-Taymuriyya) アーニシャ・タムール	○		一八四〇―一九〇二 オスマン朝エジプトの社会活動家、詩人、作家、フェミニスト
	Fatma Alive Topuz ファトゥヴ・アリーニエ	○		一八六二―一九三六 オスマン帝国初のトルコ人女性作家、父ジエヴアト・パシヤ、アフメト・ミドハトに見いだされる、レベチエヴァと交流あり
	Fawwaz Zaynab ファッワズ、ゼイナブ	○		一八六〇―一九一四 レバノンの作家・詩人。アラビア語で最初 に小説と戯曲を書いた女性。筆名 Durrat al-Sharq (東洋の真珠)。 ムスリム女性の包括的伝記 <i>Kitab al-Durr al-Manthur fi Tahqiqat Rabbat al-Khundur</i> [1896] (The Book of Scattered Pearls Regarding Categories of Women, 1894-95) の著者
	Jeshm Alet Hanim ジエシムム・アフエト妃	○		一八三〇―一九〇七 カイロ、ヘデイヴ・イスマイル・パシヤの 第三未亡人、アラブ人女子学校創設
	Makbule Leman (Fatma Makbule Leman) マクブュ・レマン	○		一八六五―一八九八 オスマン帝国時代のトルコ人女性詩人、ニ ガル・ハヌムと並び称される
	Nazli Fazli (Zainab Nazli Khanum Effendi, Zainab Nazli Hanim) ナズリ・ファズイル妃	○		一八五三―一九一三 エジプト・ムハンマド・アリー朝の王女、 文学サロンを復活させた
	Nigar Hanım ニガル・ハヌム	○		一八五六―一九一八 オスマン帝国初のトルコ人女性詩人
	ε. Marten, Erne	○		しによれば「女性の役割を家庭の差配のみに限定し、その目的の ためにのみ彼女らを養育すること、それはすなわちあらゆる市民 の家庭から世を統べるすべての間違位と思ひこみが始まることを 意味する」と述べた
	ε. Nazlı Hanım ナズリ・ハヌム	○		Nazlı Fazlı のことか?
	ε. Mariam Khadid マリヤム・ハダイーム	○		エジプトもしくはアラブの作家。しによれば「すばらしい散文作 品の著者」
b f	[Anquetil-Duperron, Abrahām-Hyacinthe 「アンクティール＝」] デュニスロン、アブラハム・ヤサント	○		一七三一―一八〇五 フランスの東洋学者、インド研究、ゾロア スター教研究、著作に <i>Zend Avesta</i> あり
	Ahmet Mithat Efendi	○		一八四四―一九一二 オスマン帝国の文壇の重鎮、ジャーナリス

アフメト・ミダハト・エフェンディ	○			ト、作家。『真実の翻訳者』紙を創刊。ファトマ・アリエエの後ろ盾となり、レベヂェヴァとも親交を結んだ。
Darmeterer, James ダルメルテール、ジャーム	○			一八四九―一八九四 フランスの東洋学者、著書 <i>Zend Avesta</i> 、アガエフの指導教授
de La Valeyé [Poussin], Louis ドゥ・ラヴァレ、プサン、ルイ	○			一八六九―一九三五 ベルギーの仏教学者、著書 <i>Histoire de la littérature française</i>
de Slane, William MacGuckin ド・スラーヌ、ウィリアム・マクギン	○			一八〇一―一八七八、フランスの東洋学者、アラビア語学者
du Meril, Edlestrand デュ・メリル、エデルスタン	○			一八〇一―一八七一 フランスの言語学者・文学史研究者、著書 <i>Poésies populaires latines du moyen âge</i>
Khediv' Ismail Pasha クタイーヴ・イスマイル・パシヤ	○			一八三〇―一八九五 エジプトのムハンマド・アリー朝支配者、ジェシュム・アフエトの夫（在位一八六三―一八九七）
Malabari, Behramji Mervanji マラバリー、ネブラームジ・メルワーンジ	○			一八五三―一九二二 インド人の詩人、著述家、改革者
Mashanov, Mikhail. A. マシヤノフ、ミハイル	○			一八五二―一九二四 ロシアの東洋学者、カザン神学アカデミー教授、著書 <i>Арабы в до-мухаммеданском периоде</i>
Michel, Francisque (François-Xavier Michel) ミシェル、フランシスケ	○			一八〇九―一八八七 フランスの歴史家、言語学者。 <i>Roman de Mahomet</i> [1831] の著者の一人。
Muhammad Ali Pasha ムハンマド・アリー・パシヤ	○			1769-1849 Mehmet Ali と呼ぶ。オスマン帝国のエジプト総督、ムハンマド・アリー朝初代君主（在位一八〇五―一八四九）、改革主義者
Muller, Friedrich Max ミュラー、フリードリッヒ・マックス	○			一八二二―一九〇〇 英のサンスクリット文献学者
Petrov, Pavel Yakolevich ペトロフ、パーヴェル	○			一八一四―一八七五 ロシアの東洋学者、言語学者。サンスクリット語、アラビア語、ペルシア語など多くの言語に通じ、ロシアで最初のサンスクリット学者として知られる
Qasim Amin カースィム・アミン	○			一八六三―一九〇八 エジプトの法律家、改革思想家

Rawlinson, George ローリンソン、ジョージ		○	一八二二—一九〇二 イギリスの歴史家、神学研究者。ヘロドトスの『歴史』の英訳で有名。著書 <i>The Seventh Great Oriental Monarchy</i> (1875)
Renan, Joseph Ernest ルナン、エルネスト		○	一八二二—一八九二 フランスの東洋学者、宗教史学者。著作 <i>L'Islanisme et La Science: conférence faite à la Sorbonne, le 29 mars 1883</i> (1883); <i>Nouvelles Etudes d'Histoire Religieuse</i> (1884)
Sablukov, Gortii Semenovich サブルコフ、ゴルヂー		○	一八〇三—一八八〇 ロシアの東洋学者、アラビスト、カザン神学アカデミー教授、クルアーンを初めてアラビア語から露訳
Scholl, Jules Charles シヨル、ジュール・シャルル		○	一八五〇—一八八六 スイスのビュクス生まれの作家、詩集に <i>L'Islam et son fondateur</i> (Paris, Librairie Sandoz & Fischbacher; Neuchâtel, Librairie J. Sandoz; Genève, Librairie Desrois, 1877) がある
Soloviev, Vladimir Sergeevich ソロヴィヨフ、ヴラジミール		○	一八五二—一九〇〇 ロシアの哲学者・思想家・詩人
Syed Ameer Ali サイイド、アミール・アリー		○	一八四九—一九二八 英領インドの法律家・歴史家・政治家、インド・ムスリムの権利擁護活動とイスラーム史執筆で知られる。
? Wasif ワスイフ (エジプトの高級官僚)		○	L によればエジプトの高級官僚
Abd ar-Rahman III アブ・アッラフマン三世		○	八八九—九六一 後ウマイヤ朝第八代アミール、初代カリフ
Abu Bakr アブー・バクル		○	五七三—六三四 ムハンマドの教友、「アッラーの使徒の代理人」を名乗った最初の人物、アライシャの父
Abu Sufyan ibn Harb アブー・スフヤーン		○	五六五—c. 六五三 メッカのクライシュ族の有力商人・軍事指導者でムハンマドを迫害したが後にイスラームに改宗、息子ムアウィヤは後にウマイヤ朝を創設
Abul Fed (Abu al-Faraj al-Isfahani) アブル・フェド (アブル・ファラジュ・イスファハニーとも)		○	八九七—九六七 アラブ人の詩歌の伝記集成 <i>Kitab al-Aghani</i> 歌の書) 二一巻の編纂者
Abu'l-Hasan Asaf Khan アーサフ・ハーン		○	一五六九—一六四一 スール・ジャハーンの兄、六代皇帝シヤール・ジャハーンの宰相を務める、ムムターズ・マハルの父

Alexander the Great アレクサンドロス大王（アレクサンドロス三世）		○	B C三五六―三三三 古代ギリシャのアルゲアス朝マケドニア王国の王（B C三三三年―B C三三三年）、東征を行った
al-Hakam II ハカム二世		○	九一五―九七六 後ウマイヤ朝第二代カリフ、アブド・アッラフマーン三世の子
Ali ibn Abi Talib アリー		○	六七六―六八〇/六八一 第四代正統カリフ、ムハンマドの娘フアティマと結婚
al-Ma'mun (Abu al-'Abbas 'Abd Allah Al-Ma'mun ibn Harun al-Rashid) マムーン		○	七八六―八三三 アッバース朝第七代カリフ
al-Mas'udi (Abu al-Hasan Ali ibn al-Husayn ibn Ali al-Mas'udi Mas'uwadi) マスウディー		○	八九六―九五六 歴史家、アラブのヘロドトスと呼ばれる、著作『黄金の牧場と宝石の鉱山』
al-Muktafi bi-Illah (Abu Muhammad Ali ibn Ahmad) ムクタフィー		○	八七七―七八九〇八 アッバース朝第十七代カリフ（九〇二―九〇八）、カトル・アル・ナダーの息子（Aはこれをムクタフィーとしている）
al-Muradid bi-Illah (Abul-'Abbas Ahmad ibn Talha al-Muwaffaq ムウタディズ		○	八五三/四―九〇二 アッバース朝第一六代カリフ（八九二―九〇二）、カトル・アル・ナダーの夫
al-Mutawakkil ala Allah (Abu al-Fadl Ja'far ibn Muhammad al-Mutassim bilah) ムタワッキル		○	八二二―八六一 アッバース朝第一〇代カリフ。Iはカトル・アル・ナダーの息子としてゐる
al-Qadir アル・カーディル	○		九四七―一〇三二 アッバース朝第二五代カリフ（九九一―一〇三二）、Iではカーディル・ビツラーフ
al-Shafi' (Abu Abdullah Muhammad b. Idris al-Shafi') シャーフイー		○	七六七―八二〇 イスラーム法学者、スンナ派法学四大イマームの一人
al-Suyuti (Jalaluddin) スユーティイー（シヤラールッディーンヒヤフ）		○	一四四五―一五〇五 マムルーク朝エジプトの学者・歴史家・法学者、著書 <i>Tarikh al-hind</i> 『カリフの歴史』
al-Tabari タバリー		○	八三八―九二三 アッバース朝の神学者・歴史家、著書『諸使徒と諸王の歴史』

Averroës (Abu al-Walid Muhammad ibn Ahmad ibn Rushd)			○	一一二六―一一九八 コルドバのイスラーム哲学者、医学者、コルドバのカーディー、アヴェロエスはラテン名
Berke ベルケ 【・ハン】	○			一二六六頃没 ジョチの息子、バトゥの弟、ジョチ・ウルの第五代君主
Bibliander: Theodor	○			一五〇四―一五六四 スイスの東洋学者
Bilal bin Rabah al-Habashi ユバル・ユン＝ラバーフ	○			五八〇―六四〇頃 ムハンマドの所有した黒人奴隷
Dante Alighieri ダンテ	○			一二六五―一三二一 フィレンツェの詩人・哲学者・政治家、著作『神曲』
Firdawsi (Hakim Abu Qasim Mansur ibn Hasan Firdawsi Tusi フヘルズウスイー	○			九三四―一〇二五 サーマーン朝とガズナ朝時代のペルシアの詩人、著作に『シャークナーメ』(王の書)
Forster: Charles フォースター、チャールズ	○			一八一五―一八九一 アイルランドの聖職者、著作に <i>Mahometanism unveiled</i> (1829)
Harun al-Rashid (al-Rashid bi-Illah Abu Ja'far Harun) ハーロン・ラッラシード	○			七六三―八〇九 アッバース朝第五代カリフ、マフデーイの息子、『千夜一夜物語』の主人公、妻はスバイダ
Hottinger: Johann Heinrich ホットティンガー、ヨハン・ハイニンリッヒ	○			一六二〇―一六六七 スイスの言語学者、神学者
Ibn Battuta (イブン・バトゥータ	○			一一三〇―一二八九/六九 モロッコ出身の旅行家、著作『Tuhfat al-nazar fi garaih al-amsar wa-sa'rah al-ashar』諸都市の新奇x-x-x旅の驚異に関する観察者たちへの贈り物』
Ibn Hallikan イブン・ハッリカン	○			一一一一―一二八二 歴史家・法学者・詩人、著作『名士辞典』
Ibn Khaldun イブン・ハルドゥーン	○			一一三二―一二四〇 歴史家・思想家・政治家。イスラーム世界最大の学者とも。著書『歴史序説』
Itutmish イルトゥテムシ	○			デリーの奴隷王朝(アルバリー朝)の سلطان。Razy'aの父
Imam al-Din al-Razi (Imam Fakhr Razi) イマーム・ファフル・ラズィー	○			一一四九/五〇―一二〇九/一〇 イスラーム神学者

Jafar al-Barmaki シキア・バマル (Aba-Fadl ʿAbd al-Fadl)		○	七六六頃―八〇三 アッバース朝宰相の息子、ハールーン・ラシードの寵臣、妹アッバースの夫
Jahangir (Nur'ud-Din Muhammad Jahangir) シキア・ハンギール		○	一五六九―一六二七 ムガル帝国第四代皇帝
Leibniz, Gottfried Wilhelm ライプニッツ、ゴットフリート・ヴィルヘルム		○	一六四六―一七一六 ドイツの哲学者・数学者
Mahdi (al-Mahdi) Abu Abd Allah Muhammad ibn Abd Allah al-Mansur ibn Muhammad ibn Abd Allah ibn Ali ibn Abd Allah ibn Abbas マフディー		○	七四四―五―七八五 アッバース朝第三代カリフ
Mansur (Abu Jafar 'Abd Allah ibn Muhammad al-Mansur) マンズール		○	七一三―七七五 アッバース朝第二代カリフ、彼の二人の従妹がウイザンチンとの戦闘に参加し軍服を着用
Molla Fattullah Kashani モッラ・ファトゥッラ・カーシャーニー		○	一五八〇没 クルアーン注釈で知られる、Tasfir minhaj al-Sadiqin Fi Hizam al-Mukhtalim
Moore, Thomas ムーア、トーマス		○	一七九一―一八五二 アイルランドの作家、詩人、 <i>Lalla Rookh, an Oriental Romance</i> (1817)。アガエフは作曲家としているが、彼の詩をもとに他の作曲家らがオペラ作品
Negus (Najashi, King Armah, Ella T'saham ʿAsʿad ʿAsʿad) ネグス (ナシシャーシーヤ)		○	五六〇―六三二 アビシニア王
Nur ad-Din (Nur ad-Din Abu al-Qasim Mahmud ibn Imad ad-Din Zengi) ヌリッディーン (ハーンギール)		○	一一一八―一一七四 ゼンギー朝（セルジューク朝シリアのオグズ・テュルク）の一員、十字軍との戦いの重要人物
Omar Khayyam オマル・ハイヤーム		○	一〇四八―一一三二 セルジューク朝期のペルシア詩人、著作に『ルバイヤート』
Oragna, Andrea (Andrea di Cione di Arcangelo) オルカーニャ (アンドレア・ディ・チオーネ・ディ・アルカンジエロ)		○	一三〇八頃―一三六八、フィレンツェの画家・彫刻家・建築家
Ozbek Khan オズベク		○	一二八二―一三四二 ジョチ・ウルス（キプチャク・ハン国）の

	ウズベク・ハン			第一〇代ハン
	Qays ibn Asim カイス・イブン・アスィム		○	アブー・ダーウードらのハディース集に登場する部族長？
	Salah ad-Din (al-Malik an-Nasir abu al-Muzaffar Salah ad-Din Yusuf bun 'ayyub) サラディン (サラーフッディーン)	○		一一三七／一一三八―一九三 アイユーブ朝の創始者 (一一六九―一九三)、第三回十字軍を撃破しイスラーム世界の英雄に
	Shakespeare, William シェークスピア		○	一五六四―一六一六 イギリスの文豪
	Timur-i Lang (Timur) タメルラン (チンギス汗)		○	一三三六―一四〇五 タイムール朝の創始者
	Turretin, Francis (François Turretin) フランシス・チュレットティン (フランソワ・チュレットティーン)		○	一六二二―一六八七 ジュネーヴの神学者
	Umar ibn al-Khattab ウマル・イブン・アル＝ハッターブ		○	五九二頃―六四四 第二代正統カリフ、当初ムハンマドに敵対するがイスラーム受容、妹の名ファーティマ
	Voltaire (François-Marie Arouet) ヴォルテール (本名フランソワ＝マリー・アルエ)		○	一六九四―一七七八 フランスの哲学者・文学者・歴史家。啓蒙主義
	Emir Asama エミール・アサマ		○	十字軍との戦いに関する自伝を残した
	Kanus ^a		○	
	Moravidi-Sakan ^a		○	ペルシアの教育大臣、著書 <i>Khairati Nison</i>
	Ahmed Makri (Ahmad ibn Muhammad al-Maggarī) アフマド・イブン・ムハンマド・マッカリー		○	一五七八頃―一六三二 マグリブ出身の歴史家。著作に <i>Nafh al-^{kh}ab</i> 『芳香』
	Sultan Bereket ^c		○	ベレケ・ハン？クリミアまたはサライにてウズベク・ハンのもとに(シ)
	Bekhtul ^c		○	ハールーン・アッラシードとズバイダの伝説に登場する人物
d	<i>Al Hiial</i>		○	一八九二創刊、カイロ、月刊誌

『アル・ビラール』				
Al-Fairat 『アル・フエタト』	○			エジプト、一八八一創刊 Hind Mawful Nair による
Al-Mukhtaf 『アル・ムクタタフ』	○			カイロの日報紙、一八八九創刊、カイロ近郊の丘の名前から
Aravia u do-magometanskom periode 『ムハンマド以前の時期におけるアラビア』	○			M. Mashanov 著
Contemporary Review	○			イギリスの雑誌、一八六六年創刊、マルバリーの論文が掲載された
Etude d'histoire religieuse	○			E. Renan 著
Hammlara Mahsus Gazete 『女性自身』紙	○			オスマン朝、オスマン語新聞、ニガル・ハヌムも編集に関わる、刊行時期一八九五―一九〇六
Histoire de la literature francaise 『衆の書』	○			L. de Lavalee 著
Kitab al-Aghani	○			Abu alFaraj al-Isfahani 編
Kitab al-Durr al-Manthur fi Tabaqat Rabbat al-Khudat	○			一八九六年のファッワーズ Fawwaz の著作 (The Book of Scattered Pearls Regarding Categories of Women)
Kitab al-Tibbar	○			二世紀の Usama ibn-Munqidh (アラブ・シリアの外交官・軍人・ハンター・詩人) の自伝
Lalla Rookh, an Oriental Romance 『ラッラ・ルーフ』	○			トーマス・ムーア作、アガエフはオペラとして言及
Lisan al-Hal	○			ペイルートの週刊新聞、一八七七創刊
L'islam et son fondateur	○			J. Scholle の詩集
Mohametanism unveiled: an inquiry in which that arch-heresy, its diffusion and continuance, are examined on a new principle, tending to confirm the evidences, and aid the propagation of the Christian faith	○			C. Forster 著

<i>Menhag al-Saleghin</i>			Molla Fatullah Kashani のタフシール (クルアーンの注釈書)、ペルシアで最もよく知られている
<i>Muruj al-Dhahab wa Maadin al-Jawahir</i> 『黄金の牧場 [宝石の鉱山]』		○	マスウードイー著、百科全書的な世界史、九四七年完成、九五六年集成、約六〇〇ページ
<i>Namdaran-i Zanan-i Islamiyon</i> 『偉大なムスリム女性たち』		○	ファトマ・アリエ著、一八九五(一八九二)としている情報も、新聞掲載が先か?、現代トルコ語では <i>Ulu Islam Kadimlar)</i>
<i>Neft al-ib</i> 『芳香』		○	アフマド・イブン・ムハンマド・マッカリー著、前半はイスラーム時代のイベリア半島に関する貴重な情報源
<i>Poésies populaires latines du moyen âge</i>		○	Edel du Meil 著、一八四七年
<i>Roman de Mahomet</i>		○	F. Michelet 著
<i>Ruba'iyat</i> 『ルバイヤート』		○	オマル・ハイヤーム著、一世紀
<i>Shah Namah</i> 『王書』		○	フェルドウスイー著
<i>Tahrir al-mara</i> 『女性の解放』		○	Q. Ann 著、カイロ、一八九九
<i>Tarjuman-i Hakikat</i> 『真実の翻訳者』		○	イスタンブルでシドハトが創刊した日刊紙
The Influence of Women in Islam		○	Syed Ameer Ali 著、 <i>The Nineteenth Century</i> , XLV/267: 755-774, 1899. (掲載雑誌はイギリスで刊行されたため◎)
<i>The Mahomet and the Mahometism</i>		○	M. Muller 著
<i>The Seventh Great Oriental Monarchy I: or the Geography, History and Antiquities of the Sassanian or New Persian Empire. Collected and Illustrated from Ancient and Modern Sources.)</i>		○	G. Rawlinson 著、一八八二
<i>Vizantiskaya prokto-musul'manskaya literatura</i> 『バイザンツの反ムスリム文献』		○	カザン宣教師出版 <i>Izdatnie kazanskikh missionerov</i> 2-469

Wafeyat al-A'yan wa-Anba' Abna' az-Zaman 『名士辞典』		○	翻訳あり de Stein, W. G. <i> Ibn Khallican's biographical dictionary</i> , vols. 1-4, Paris, 1843-1871.
Zende Avesta 『アヴェスタ』		○	J. Darmesteter 著
? 『カリフの文化』		○	W. M. de Slane 著
? 『イクラヤト』		○	エジプトで発行された定期刊行物
? <i>El-Imraat-fish-Sarkh</i> 『東洋における女性』	○		Wasi 著
? Dh-nisa-atl-Islam 『ムスリム女性』（イスラームにおける女性。）	○		Syed Ameer Ali 著
? Kheirat Nisan (素晴らしき女性。)		○	ペルシアの教育大臣 Moramidi-Saltan 著 (A)
? Madzhman-Nurein		○	

（原綴・備考については大塚（二〇〇二）および Bewley（2004）を主に参照）

このうち、カテゴリー a については、ハデージャやアーイシャといったムハンマドの妻たち、ムハンマドの娘ファアティマなど、ムハンマドに連なるイスラーム的女性の理想像とされるような女性たちのほか、後世に名を残したハデージャ学者やクルアーン学者、詩人、統治者、統治者の妻などのムスリム女性たちであり、イスラーム史上の傑出した女性を語る際に今日でもしばしば言及される人物がおおむね網羅されている。そしてこれらの女性たちが自由に自らの意志で様々な活動を行えたことが強調されるのである。これらについては例えば、イスラーム文献として、イブン・ハッリカーンの『名士辞典』、歴史家マスウデーイーの『黄金の牧場と宝石の鉱山』、『千夜一夜物語』、スューテイー、ヨーロッパの東洋学者としてはフランスのウイリアム・マゲキン・ド・スラーヌ、アブラアム・ヤサント・アンクティル・デュベ

ロンらに基づいている。テュルク人の女性についてはイブン・バトゥータ、インドにおけるムスリム女性についてはトーマス・ムーアの詩なども取り上げられている。

レベチエヴァとアガエフの参照関係を探る上でより重要なのは、カテゴリーbおよびカテゴリーcの一部である。そこでは、特にアガエフにおいて多くのヨーロッパの学者・作家・著述家らの名を確認することができる。そのうちカテゴリーcに含めた「ヨーロッパにおける反イスラーム的文献」の作者、すなわち十字軍という時代的背景のもとでムハンマドを「角の生えた悪魔」や民を邪悪に引き入れた「反キリスト」などと描くことによつて、あるいは笑い飛ばし、パロディ化し、歪曲することによつて、イスラームに対する侮蔑的な描写や評価を行った人物として、ダンテ、オルカーニャ（画家）、シエークスピア、ライブニッツ、フランソワ・トゥレットイーニ、ヴォルテールらが列挙される。さらにやがてイスラームの学術的研究に着手した学者も当時の「最良の知性」を備えながらも、同様の「偏見」に浸食されていたとして、テオドール・ビブリアンダー、ヨハン・ホッティンガーらが組上に上つている。カテゴリーbに含めたチャールズ・フォスターは一九世紀になつてもそのような立場を継承した東洋学者として提示される。

一方、それらとは逆に、ついにイスラーム世界に対する理解と共感を表明するようになった一九世紀の学者としてマックス・ミュラー、ロシアの哲学者ウラジミール・ソロヴィヨフらをアガエフは挙げている。

その他、アガエフはこの著作で、彼自身のペルシア的アイデンティティにもかかわらず、ムスリム女性の無権利状態や地位の凋落の原因を「ペルシア的慣習」に帰する傾向が強いのだが、その古代の部分について語るにあつて、フェルドゥスィー『王の書』の他、ジャーム・ダルメステール、ジョージ・ローリンソンらの記述を引いている。また、ムハンマド以前のアラブにおいて女性がいかに「野蛮な慣習」に取り巻かれていたかについては、例えば女兒が生まれた場合には不吉とみなされ、砂に埋めたり、奴隷として売ったり、家畜と交換したりしたという例を、ジュール・シャルル・シヨル、ロシアのミハイル・マシヤノフに依拠して述べ、あるいは一夫多妻や女性の無権利状態について、シーア派で最も権

威のあるクルアーンの注釈書とされるモッラー・ファトゥッラー・カーシャーニーや、イブン・ハルドゥーンから引用している。

一方、ムハンマドがそれらの野蛮な慣習に反対し、いかに女性を尊重したかを語るにあたっては、クルアーン（ヨーロッパ諸語からの翻訳でなく、初めて直接アラビア語からロシア語に翻訳されたゴルヂー・サブルコフ訳を用いている）、イマーム・ファル・ラーズイー、モッラー・ファトゥッラー・カシャーニーらに依拠して、イスラームは理想としては一夫一妻を志向していると主張した。一九世紀のフランスの東洋学者エルネスト・ルナンについてもこのような文脈での引用が多い。

アガエフは野蛮な慣習として一夫多妻、隔離、ヴェール、相続や結婚における女性の無権利状態を挙げているが、基本的にはレベヂェヴァも同様の立場を取っていたとみることができる。レベヂェヴァはムスリム女性の「顔の覆い」に対して「まったく宗教によって求められるものではない、野蛮な慣習」（二九頁）と述べ、そしてこれらが広まったことこそ、ムスリム文明の進化の停止とムスリム女性の地位の凋落の象徴だととらえている。

注① アガエフもフランス留学時代の一九九二年指導教授とともにロン

ドンでの国際東洋学者会議に参加した経験がある（Shisler 2003: 66）。

注② James Darmesteter（一八四九―一八九四）。アガエフのフラン

ス留学時代の指導教授とはこのダルメステールである。ゾロアス

ター学の分野で顕著な業績がある。

注③ Joseph Ernest Renan（一八二二―一八九二）。その顕著な植民地

主義や初期オリエンタリズムの点で同時代に批判を受けることになったフランスの東洋学者。アガエフ自身もフランスでその教えを受けた（Shisler 2003: 66-67）。

第三章 イスラーム的男女平等論の参照関係

レベヂェヴァとアガエフはイスラーム的男女平等論を展開するにあたって、重点的に誰のどのような著作や主張を参照したのだろうか。両者の著作の記述の検討と、（現時点では限定的ではあるが）その他の文献との照合などの作業の結果、特に重要と思われる人物を以下に取り上げる。

同時代にイスラーム世界から発信されたムスリム女性解放論としてまず思い浮かぶのは、しばしばアラブ初の（しかも男性の）フェミニストと称される、エジプトのカースイム・アミンと、当時賛否両論の大センセーションを巻き起こしたと言われるその著作『女性の解放』*Tahrir al-mar'ia*（一八九九年）および『新しい女性』*Al-mar'ia al-jadida*（一九〇〇年）であろう。アミンは女性の初等教育推進、ヴェール廃止、一夫多妻の禁止などを掲げ、国家発展のためには社会の基礎となる家族を支える女性の解放が必要だと訴え、同時にこれらはイスラームの教えに反しないことを強調したのである（Amin 2000）。

アミンの著作の刊行年とレベヂェヴァおよびアガエフの著作の刊行年に注目すれば、それらはあたかも連続しているかのように見える。アミンの著作がそのようなセンセーションを起こしていたとすれば、レベヂェヴァとアガエフのアンテナにも当然それは触れたことが予想されるところである。

実際、レベヂェヴァは、次のように二箇所アミンに言及している。

㉔⑤「私たちはそこに設定された視野の広さにおいて傑出した二つの著作、すなわちカイロで混合法廷を代表するカースイム・アミンの『女性の解放』、そしてエジプトの高級官僚ワスイフの『東洋における女性』^①に言及しないわけにはいかない……」（二四頁）

㉔⑥「つい最近、すでに私たちが先に言及したムスリム、カースイム・アミン・ベイはエジプトでムスリム女性の利益を擁護する意見を熱く表明し、そのために次のものを求めている。

一・ヨーロッパ的教育と養育

二. あらゆる考え・感情・行動における自立

三. 夫の選択にあたっての自由の付与

四. 妻を追い払う権利の夫からのほく奪

五. 一夫多妻を禁じる法律の制定

このように、イスラームを熟知し、信仰する人々自身が女性の権利の擁護者として意見表明をしているのである。

東洋の影響力ある人物たちが私たちのムスリム女性解放に関する考えの現実的な実現を支援し、私たちのほうへ歩んできてくれることを「私たちは」期待している。」(二三三―三四頁)

一方、アガエフは、エジプトにおける当時の状況について、A②に示したように「刊行物では女性擁護の声が上がり、勇気ある人々が：ムスリム女性の解放について語り始めている」と言及しているが、著作の中では直接的にはアミーンの名には触れていない。しかし、彼の著作が前述のように一九〇五年アラビア語に翻訳されてカイロで出版された際には、それは訳者序言の中で他ならぬアミーンに捧げられた（Amin-sare 2015）。

ファトマ・アリエ Fatma Aliye Topuz, Fatma Aliye Hanım (一八六二―一九三六)

しばしばトルコ人で最初の、あるいはイスラーム世界で最初の女性小説家と評されるファトマ・アリエ^②も着目すべき人物である。レベヂエヴァに関する先行研究においてすでに彼女がイスタンブル滞時にミドハトを通じてアリエと直接の交流をもっていたことが明らかにされている（Olcay 2017）。それに先立って、アリエは『名高きムスリム女性』*Namdaran-ı Zenan-ı İslamıyan*（一八九五年）、『イスラームの女性』*Nisvan-ı İslam*（一八九六年）などの作品を発表しており、レベヂエヴァもアガエフも著作の中でアリエを称賛している。なお、レベヂエヴァはミドハトの勧めに従って、

『イスラームの女性』をオスマン・トルコ語からフランス語(タイトルは *Les Femmes Musulmanes*) とアラビア語に翻訳したことが知られている (Olcay 2017)。ただし、レベチエヴァにおいては直接の知己があつたにも関わらず、アリエエへの言及は、以下のように、かなりあっさりとしたものとなっている。

L⑦ 「コンスタンティノープルで著名なのは、きわめて高い教育を受け、いくつかの小説と多くの哲学的論考を書いた女性ファトマ・アリエエ・ハヌム、そしてその哲学的書簡により『有名な』マクブレ・レマン・ハヌムである。これら二人の女性の作品は十年前にアフメト・ミドハト・エフェンディが編集者だつた『真実の翻訳者』紙に掲載されたが、当時自らの署名を付すことはできなかつたのである。」(二二―二三頁)

一方、アガエフは、この著作の執筆時にはアリエエと少なくとも直接の接点はなかつたと思われるが、以下に見るように、アリエエを歴史家と理解していることがうかがえる。そして、アッバース朝期にペルシア的慣習がアラブに受容されたことが「女性の空間の仕切り」ひいては「女性の覆い」が広まる契機となつたが、ただしその初期においてそれは決して女性を抑圧するようなものではなかつたという主張をアリエエを典拠として述べており、彼女の著作からかなりの分量を引用している。

A⑤ (先のA②に続く)「そうした声はコンスタンティノープル、カイロ、その他トルコやエジプトの地方都市における女子学校開設や、ムスリムの間における女性学者・作家の一世代の形成を少なからず促進した」という記述への注として「例えば、歴史家としてはファチマ・アリア Anna, Fatima 「=ファトマ・アリエエ」、作家としては「エジプトの」ナズリ・ハヌムと「トルコの」ニガル・ハヌムである。」(二三頁、脚注二)

A⑥ 「事實は事實なのである」と、トルコの女性作家「フアトマ・アリエエ」はそのすばらしく充実した著作『名高きムスリム女性』で言う。「どんな色欲に満ちたでっちあげも預言者の光あふれる姿、とりわけ彼「ムハンマド」の女性への態度に、影を投げかけることはできない。」「歴史から見ても確実にわかることだが、」と彼女は続ける、「ムハンマドと最初のカリフたちのもとでは女性完全に自由に男性と交流し、両性の客を迎え、通りを散歩し、モスクなどを訪れた。…ある時預言者は、アブー・バクルの娘アスマー「アアィシャの姉」の体の一部が薄い生地衣服の陰から見えているのに気づき、こう言った、「アスマーよ、女性において手と顔以外のいずれかの体の部分が見えるのは好ましくない。」ムハンマドの娘ファアティマは父の死後、カリフ「とった」アブー・バクルにこのような父の強制に対する抗議を表明した。ムハンマドのもとでは、若い寡婦が知己を得て「次の」夫を探そうと公共の場所に姿を現すという慣習さえあった。…」（二七―二八頁）

A⑦ 「…「アッバース朝期の女性の」サロンでもてなしは重荷であり、これは時間と労力を要した、なぜなら、ファトマ・アリエエによれば、「服装は複雑になり、化粧品が流行し、女性特有のコケットがもてはやされた」からだ。こうした女性たちは用務であれ、単なる知り合いであれ、常に客をもてなす準備ができていなければならなかった。そして、この面倒を回避し、部屋着の快適さをもつてくつろぐために、シリア、メソポタミア、ペルシアの貴婦人の例にならって、その陰に座って誰とも面会することができる仕切りを導入することを思いついたのだ。これがアラブにおける女性の凋落の始まりであった。この仕切りはやがて、文化的に彼らを魅了し凌駕したシリア人とペルシア人を模倣した男性たちの関与のもと、日に日に分厚いものになり、ついには透かし見ることでできない中国の壁に変わってしまった。[とはいえ]九―一〇世紀のこの時代、カリフ国における女性の状況はまだ十分に自立的で自由だった。」（四一―四二頁）

A⑧ 「しかし当時の「アッバース朝期の」ハーレムは」とファトマ・アリエエは言う、「現在のハーレムとは何の関連もなく、ペルシアのアンダプン *андапун*^⑤ともギリシアのギネケイ *гинекей* 「古代ギリシアにおける女性の居室」とも似ていなかった。こ

れは現代のヨーロッパ婦人のサロンのようなものであった。女主人はそこで、まったく客の性別に遠慮することなく、自分の個人的な客を受け入れた。彼女はそこでタバを催したり、晩餐会をしたりしたが、夫を邪魔することはなく、夫は「自宅の」自分の空間で自分のやりたいことができたのである。」この女主人とはどのような存在であったのか、家族と社会における自分の役割をどのように理解し、誰に囲まれ、彼女は周囲にどのように影響を及ぼしたか、さて我々はそのような女性たちの個性の記述とりにかろう。：(四二頁)

サイド・アミール・アリー Syed Ameer Ali (一八四九～一九二八)

次にぜひ取り上げておかねばならないのは、英領インドの歴史家・弁護士で、後に議員にもなったサイド・アミール・アリー^⑥である。英領インドおよびイギリス本国においてインド・ムスリムの権利を擁護する活動を広く展開した改革主義者として知られ、また『イスラームの精神』(Ali 1891)や『サラセン抄史』(Ali 1892a)など、英語で執筆されたイスラーム通史の分野でも当時高い評価を受けていた。この二つの著作にはムスリム女性に関する章や節が設けられており、具体的には前者では第三章「イスラームにおける女性の地位」、後者では第五章「回顧(統)——バグダード」の「女性」および「その地位」という連続した節、第三章「回顧——グラナダ王国」の「女性の地位」および「女性学者たち」という連続した節である。

ここでは、まず先にアガエフによる言及について見ておきたい。アガエフはアミール・アリーの「イスラームにおける女性の影響」(Ali 1899b)と題する論文を具体的に参照文献として挙げており、以下のように述べている。

A^⑨「ムハンマドの娘ファアティマはこの時期のムスリム女性の典型である。その性格の温和さ、家族道徳、社会影響力によりすべての時代、すべての国の理想的女性像である。インドの作家ミール・アリー『サイド・アミール・アリー』は最も信頼で

きる史料に基づいてファアティマの個性を奇跡的に描いた。夫婦間の愛着、相思相愛、子供への愛は現在にいたるまでムスリムの家族生活の理想である。」（三四頁）

これに続くイスラーム史上の優れた女性に関するアガエフの記述は、おおむねサイイド・アミール・アリーの前述の論文に依拠していることが確認できる。

一方、レベヂエヴァが直接アミール・アリーに言及しているのはカースィム・アミーンについて述べたL⑤に続く部分である。

L⑧ 「…カルカッタのムスリム著述家サイイド・アミール・アリーの論文すなわち『ムスリム女性』^⑧も取り上げたい（二五頁）

上記の言及自体はシンプルきわまりないが、実はレベヂエヴァは、イスラーム的男女平等の根拠を語るに当たって、その多くをアミール・アリー『サラセン抄史』に依拠していることが、照合の結果、明らかとなった。その対応関係の一部を以下に示そう。（AAはアリーの著作からの引用であることを示し、その訳については『サラセン抄史』の一九二二年改訂版からの邦訳の復刻版（アリー一九四二）の訳文を新かなづかい・新字体で示す。）

L⑨ 「アラブ文明の最盛期におけるムスリム女性の社会的立場に目を向けるなら、私たちは、女性が男性と同様の教育と同様の権利を得ることをイスラームが妨害したことは決してなかったことを目にする。」という文に続けて「実際、ウマイヤ朝および初期のアッバース朝時代のバグダードでは、ムスリム世界の文明の進化を止めた最初の人物カーディル・ピッラーフ^⑨の治世（紀元九二一年）以前までは、そうであった。

私たちは、ムスリム女性が果たした尖鋭的で顕著な一連の事例と事実をあげることができる。

カリフ・マンスールの治世において二人の姫、彼の従妹たちがビザンチンに対する軍事行動に参加し、男性用の鎧を着用した。

「ハールーン・アッ」ラシードおよびマアムーンの時代には、婦人たちは学者たちと議論をし、詩を吟味し、その教養であらゆる人々を驚かせつつ、社会の精神となった。

若い女性たちは騎馬隊で戦うことさえあり、軍を指揮した。

上流社会の夫人のもとでの集まりはムタワツキルの治世まで続いた。

ムタワツキル〔原文ママ〕の母、カトル・アル・ナダーは、高等裁判の審議を取り仕切り、外国大使・高官を特別に謁見し、裁判官と高貴な人々を招集し、彼女自身の手により署名した国家令を發布した。〔一六〇七頁〕

(A A ① 第二五章 「アバース朝の初期には、婦人の地位もオマイア朝と少しも違っていなかった。事実絶対的な籠居と両性隔離の風が普通になったのはカーディル・ビラーの時代になってからのことらしく、彼は回教世界の進歩を妨げることには於いて他のどの君主よりも甚だしかつたといわなければならない。マンスールの時代には二人の王女（彼の従姉妹）が、メルワーンと争って誓った言葉を実行するために、鎧を着てビザンチン帝国との戦争に出たという話がある。ラシードの時代にも、アラビアの娘たちが馬に乗って出征し軍隊を指揮した事実がある。ムタタデルの母后は自ら高等法院の裁判長となって訴願を聞き、重臣や外国使臣を引見した。地位の高い教養ある婦人の住居に於ける集会や講演会は、ムタワツキルの時代まで常に行われていた。」〔邦訳三九七―三九八頁〕

上記に続く部分においても、ハールーン・アッラシードの妻ズバイダ、マアムーンの妻ブーラーン、ムタワツキル時代の詩人ファズル、一二世紀にバグダードで歴史・文学を講じたシャイハ・シユフダ（ファフルーン・ニサ）、法学者ザイナブ・ウンム・ウル・ムエイイド、サラディン時代に歴史を講じたタキエイエといった女性たちに関するレベヂェヴァの記述

は、ほぼ『サラセン抄史』の上記の続きの部分と一致していることが確認できる。
さらに別の箇所の例をあげておこう。

L⑩ 「西アジアの社会構造と政治が凋落に向かった一二世紀「原文ママ」の災難の中で、女性はなお騎士的な崇拜と最上級の優しさを伴う配慮の対象であった。結婚は厳肅な行爲と認められ、そして家族の寵は聖なる場所とみなされ、子供の誕生は神の恩寵だと考えられていた。母親は息子たちにとって最初の教育者であり、彼らはやがて養育者の手に委ねられた。娘たちは高度な善行の規則を教えられ、『キターブ・ウル・イティバール』なる書にある表現に従えば、ウマハート・ウル・リジャール、すなわち「市民の母」となるべく養育された。」（一〇頁）

（A A② 第二三章 「アミール・オサーマの書いたものには、アラビア人の中で婦人が如何に高い地位を占めていたかが非常にはっきりと出ている。十一世紀頃西亜の社会政治組織が殆ど崩壊にひんしていた大混乱の真只中に於いても、婦人は尚、特にシャイザルに於いては、騎士的な称賛と優しい保護の対象であった。結婚は厳肅な行爲とされ、家庭は神聖視され、子供特に男子の出生は天の恵みと見做されていた。息子や娘の訓育は母の仕事であって、息子たちは教育者の手に委ねられるまで母の手によって育てられ、娘は徳高く心の清い婦人——将来の「人の母」（原注：ウマハート・ウル・リジャール——「キターブ・ウル・イティバール」第一〇〇頁）——たるべく躾けられた。」（邦訳三九九頁、四一五頁）

L⑪ 「マアムーンとムウタスィムの時代に生きたオバイダーは、その美しさ、善良さ、才能において優れた女性として、上述の書「キターブ・ウル・アガーニ」に記述されている。彼女の声は、歌うような柔らかなもので、彼女が伴奏に使ったタンバリンの芸術性ゆえに彼女に「エッタシブリエ」というニックネームが与えられた。」（一一頁）

(A A ③ 第二五章 「タンバリンの名手(アタンブリーア) オバイダーはマームーンとムタシムの時代の女性であるが、「キターブ・ウル・アガーニ」の著者の言によれば非常な美と徳と才を備えた婦人であったという。彼女はこの楽器を巧みに弾じて名をあげたが、作曲も自らしたのであった。」(邦訳三九八頁)

このように、レベヂェヴァもアガエフもイスラーム史における傑出した女性を描くにあたり、かなりの部分をサイイド・アミール・アリーに依拠したことは明らかである。一般的な執筆の作法からすれば、引用箇所・引用元が明確に示されていないことはもちろん問題であるわけだが、本論の主眼はその点において両者を批判することにはなく、むしろ同時代の背景のもとで彼らがどのような範囲でどのような文献や情報に目配りをし、着目し、自分の主張の根拠としたかを明らかにすることにあった。その意味ではサイイド・アミール・アリーにここまで大きく依拠していた点は、カーシム・アミーンやファトマ・アリエエの参照がある程度予想できたことに比すれば、新たな発見と言ってよいだろう。

① この人物と著作については現時点で確認できていない。

② オスマン帝国の高級官僚であり歴史家でもあったジェヴアト・パシヤ Cevdet Paşa の娘として生まれ、当時の女性としては例外的な高度な教育を家庭で受けて、アラビア語やフランス語にも通じるようになった。結婚後一〇年を経て、夫の了承と、父親やアフメト・ミッドハトの支援を受けてフランスの小説の翻訳や小説の執筆に携わるようになったが、当時の社会的雰囲気の中では実名を名乗ることができず、当初は「一婦人 bir kadın」という筆名を用いた。作品を通じて、男女平等や個人主義の尊重を訴えた。またヴェールを着けず洋装で公共の場に姿を現した最初のトルコ人女性の一人でもある。

③ Makbule Lemhan Hamm (一八六五―一八九八)。本名はファトマ・マクブレ。ニガル・ハヌムとともに一九世紀を代表するオスマン帝国

の女性詩人。

④ *Tercüman-ı Hakikat* ニハトがイスタンブールで創刊した日刊新聞(一八七八―一九二一)。

⑤ 現時点で何を意味するのか確定できていない。

⑥ サイイド・アミール・アリーはインドの名門ムスリムの出自を持つムスリム女性に関する文献としては、ここで取り上げたもの他に、
“The Real Status of Women in Islam.” *The Nineteenth Century*, XXX/175: 387-399. *The Regal Position of Women in Islam*, London: The University of London Press, 1912. があ る (Forward 1999: 151-152)。

⑦ 邦訳では「アバース朝概観(統)」となっている。

⑧ レベヂェヴァは書名を En-nuca-φiri-Nuca とアラビア語風に書い

ており、レベチエヴァがこの文献を英語原典で読んだのか、あるいは翻訳などで読んだのか不明である。

⑨ 第五代カリフのアル・カーデイルのこと。九二一年という年号も

現在一般的に理解されているアル・カーデイルの統治期とは若干ずれている。

おわりに——二つの帝国と二つの世紀のはざままで——

レベチエヴァとアガエフの後の人生を考えると、ロシア革命の大動乱に向かう時代のなかで、レベチエヴァは一九一三年以降消息不明であり、アガエフは一九〇八年ロシアからオスマン帝国へ亡命を余儀なくされた。やがてロシアではソヴエト政権が成立したことにより科学的無神論を含む社会主義的イデオロギーのもとで、トルコにおいては新生トルコ共和国を率いるアタテュルクの強力な主導による西洋化政策のもとで、宗教を否定するに等しいラディカルな世俗主義が猛烈な勢いを得て支配的となり、イスラーム的男女平等に基づいた女性解放論は居場所を失い、埋もれてしまわざるを得なかったのではないだろうか。いかなれば、彼らのムスリム女性解放論は、ロシア帝国とオスマン帝国という二つの帝国のはざままで、二つの世紀のはざままで一瞬きらめいた後に、忘却されてしまったのである。

レベチエヴァとアガエフが共感したイスラーム的男女平等論の共振の輪とは、カースイム・アミン、ファトマ・アリエ、サイイド・アミール・アリーらがそうであったように、女性の地位や自由という点でムハンマドの時代を理想化するある種のイスラーム復古主義に拠ると同時に、当時としてはそれぞれの環境において例外的ともいえる高度なヨーロッパ的教育を受けた人々の間に共有されるものであったとみることができよう。その背景として、ヨーロッパにおける東洋学の発展とそのネットワークが重要な下地を成しているのではないだろうか。

一方こうした見方の評価については、例えばアミンについては、ヴェールや隔離といった慣習を「文化の問題」にすることに結果として加担してしまった、自民族の女性庶民をいたずらに貶めた、女性の解放を主張しながらも男性優

位の社会や家父長制を前提としているのが明らかであるなどの観点から（アハメド二〇〇〇…二〇六―二四二）、サイド・アミール・アリーについてはムスリム内部の区分を過小評価ないし無視しアラブ称賛に偏り過ぎた、ヨーロッパがイスラームについて抱いていた不安や神経過敏、イスラームのステレオタイプ化の理由に気づかなかつた（Forward 1999: 133）などの観点から、すでに批判されてきた経緯がある。そしてそのような批判は、レベヂェヴァとアガエフがヴェールを一樣に「野蛮な慣習」とみなし、それを「文化」の問題として語りがちであり、あるいは未来の国を担う子を育てる「良妻賢母」像をアプリアリに期待した点などにおいて、アミーンらに対してなされてきた数々の批判は、確かに一定程度レベヂェヴァにもアガエフにもあてはまるのである。この点については、より深い考察が今後必要である。

それでもなお本論の検討が意味をもつとすれば、ひとつには事実としてこのようなムスリム女性解放論がロシア帝国からも発信されていたことを捉えておく必要があるからである。また、別の観点からは、世俗主義こそ近代であるという命題が追求されたのが二〇世紀であるとするなら、その命題は二一世紀の今日大きく揺らいでおり、宗教の復権や公共宗教の役割などが広く議論されるようになってきている現実がある。カースイム・アミーンやサイイド・アミール・アリーに対する批判をふまえた上で、あらためてイスラームの男女平等論に目を向けることもあながち無意味ではないだろう。現代のタータルスタンでレベヂェヴァが、アゼルバイジャンでアガエフが一部の人々によって見直されようとしていることもあるいはそれを物語っているのかもしれない。

参考文献

- Агаев, Ахмед-бек. (1901) *Женщина по исламу и в исламе*. Тифлис.
Али-заде, Э. А. (2015) "О переводе Селима Коейна брошуру Ахмед-бега Агаева под арабским названием «права женщины в исламе»." *Восток* 6: 151-157. (<https://www.elibrary.ru/item.asp?id=25775639>)

- Лебедева, Ольга С. (1900). Об эмансипации мусульманской женщины. Санкт-Петербург.
- Олжай, Тюркан (Олеся, Түрккан) (2010) "Ольга Сергеевна Лебедева и её вклад в русско-турецкие литературные связи." *Проблемы филологии. Языки и литература*, 1: 121–126.
- Острумов, Н. П. (1911) *Современные правовое положение мусульманской женщины*. Казань.
- Острумов, Н. П. (1915) *К 50-летию Тахкенита*. Тахкенитские сурты под русским влиянием. Ташкент.
- Ali, Syed Ameer. (1891) *The Life and Teachings of Mohammed: Or, the Spirit of Islam*. London: W. H. Allen & Co.
- Ali, Syed Ameer. (1899a) *A Short History of the Saracens: Being a Concise Account of the Rise and Decline of the Saracenic Power and of the Economic, Social and Intellectual Development of the Arab Nation from the Earliest Times to the Destruction of Bagdad, and the Expulsion of the Moors from Spain*. London: MacMillan & Co. (邦訳: トモール・アリー (一九四二) 『回教史』(コーハント叢書第一巻) 塚本五郎・武井武夫訳(原書房))
- Ali, Syed Ameer. (1899b) "The Influence of Women in Islam." *The Nineteenth Century*, XLV/267: 755–774.
- Amin, Qasim. (2000) *The Liberation of Women. The New Woman: Two Documents in the History of Egyptian Feminism*, trans. by S. S. Peterson, Cairo/New York
- Bewley, A. (2004) *Muslim Women: A Biographical Dictionary*. London: Ta-Ha Publishers.
- Findley, Carter Vaughn. (1998) "An Ottoman Orientalist in Europe: Ahmed Midhat Meets Madame Gülnar, 1889." *American Historical Review* 103: 15–49.
- Forward, Martin. (1999) *The Failure of Islamic Modernism?: Syed Ameer Ali's Interpretation of Islam*. West Berlin, Bruxelles: Frankfurt a. M.: New York, Wien: Lang.
- Oleay, Tınkan. (2017) "Olga Lebedeva (Madame Gülnar) A Russian Orientalist and Translator Enchants the Ottomans." *Slavic Review* 29(2): 40–71. (<https://discovery.ucl.ac.uk/id/eprint/1558245/1/4%20Oleay.pdf>)
- Rortlich, A. (2016). "Challenges of Belonging: The Muslims of Late Imperial Russia and the Contested Terrain of Identity and Gender." in Y. Ro'i, ed., *Democracy and Pluralism in Muslim Eurasia*. Routledge, pp. 39–52.
- Ruthchild, R. G. (2010) *Equality & Revolution: Women's Right in the Russian Empire, 1905–1917*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- Shisler, A. Holly. (2003) *Between Two Empires: Ahmet Agagül and the New Turkey*. London and New York: I. B. Tauris.
- Stites, R. (1990) *The Women's Liberation Movement in Russia: Feminism, Nihilism, and Bolshevism, 1860–1930*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

アハメド、ライラ (二〇〇〇) 『イスラームにおける女性とジェンダー——近代論争の歴史的起源』林正雄他訳、法政大学出版局。

磯貝真澄 (二〇一四) 「ヴォルガ・ウラル地域のテュルク系ムスリム知識人と女性の啓蒙・教育」橋本伸也編『ロシア帝国の民族知識人——大学・学知・ネットワーク』昭和堂、一五六～一七七頁。

大塚和夫他編 (二〇〇二) 『岩波イスラーム辞典』岩波書店。

帯谷知可 (二〇一六) 「中央アジアのムスリム定住民女性とイスラーム・ヴェールに関する帝政ロシアの植民地主義的言説」『西南アジア研究』八四・四〇～五四。

帯谷知可 (二〇一七) 「二〇世紀初頭の帝政ロシアにおけるムスリム女性をめぐる議論についての覚書——N・オストロウーモフ『ムスリム女性の権利の状況』(カザン、一九一一年) から」帯谷知可編『社会主義的近代とイスラーム、ジェンダー、家族』(IRAS Discussion Paper No. 69) 京都大学東南アジア地域研究所、五～一三頁。

帯谷知可 (二〇一九) 「帝政ロシアのムスリム女性言説とその共振——A. アガエフの著作を中心に」野田仁・小松久男編『近代中央ユーラシアの眺望』山川出版社、二四八～二六六頁。

(京都大学東南アジア地域研究所准教授)

Calls to Emancipate Muslim Women from within the Russian Empire:
The Views of O. S. Lebedeva and A. Agaev on the Equality
between Men and Women in Islam

by

OBIYA Chika

At the beginning of the 20th century, the Russian Empire had almost 20 million Muslims within its borders. This article brings into perspective an overview of the Muslim women's emancipation movement in the Russian Empire in that era and focuses on two Russian works calling for the

liberation of Muslim women from within the Russian Empire: *About the Emancipation of Muslim Woman* (1900) by the Russian translator and orientalist Ol'ga Sergeevna Lebedeva and *Woman According to Islam and in Islam* (1901) by the Azerbaijani Muslim journalist and reformist Akhmed-bek Agaev. Both works were based on the idea of equality between men and women in accordance with Islamic principles. By analyzing these works and referring to relevant literature, this paper sheds light on how such perspectives on Muslim women's emancipation resonated in a cross-border arena. The author argues that both Lebedeva and Agaev intended to resist orientalist views of the Muslim world in Russia and found sympathizers among some contemporary Muslim activists and writers, including key figures such as Qasim Amin from Egypt, Fatma Aliye from Turkey, and Syed Ameer Ali from British India.

Key Words; Ol'ga Sergeevna Lebedeva, Akhmed-bek Agaev,
Russian Empire, Emancipation of Muslim women,
Islam and gender